

宮本 輝「暑い道」論

藤 村 猛

要 旨

宮本輝の「暑い道」は、語り手である「私」の回想や友人のゲン（尾杉源太郎）との会話で成り立っている。「私」たちは大阪のスラム街出身であり、当時の貧しい生活を背景として、マドンナであった「さつき」との交流や、四人の仲間との友情や葛藤などが描かれている。さつきの美しさや「愛情」が印象的であり、その思い出が「私」たちの青春への郷愁を醸し出している。

キーワード

スラム街・美少女・恋愛・青春

一 はじめに

「暑い道」(『別冊文藝春秋』1987年夏号)は、語り手の「私」の回想と、中学以来の友人・尾杉源太郎(ゲン)との会話で成り立っている。作品(全三章)は、一章の前半と三章が現在のもの、一章後半と二章が過去(中二〜高二)の出来事・回想である。

二人以外の登場人物としては、昔からの仲間の石井健一(ケンチ)や神田正直(カンちゃん)、そして、「私」たちのアイドルであった「自転車屋のさつき」である。作品の舞台となった場所は、一章前半と三章が大阪此花区の場合の「山本食堂」であり、一章後半と二章は、かつて「私」たちが住んでいた「神崎川の堤防脇に密集するスラム街」(47¹)である。

作品では、当時のスラム街の様子や「私」たちの生活が描かれ、作品の一つの軸として、「私」たちと美少女・さつきとの交流が描かれる。それは、「通過儀礼のようにすこす性の体験が、ここでは醜悪な現実のなかでも、その束の間ゆえに至福の味わいを主人公に

与え、しかもその少女の転変の生活を背景に、やはり故郷以外ではありえなかったそのスラム街の思い出を感慨ぶかきもの⁽²⁾（文庫本の解説者・饗庭孝男氏）としていて、「私たち」のさつきへの思いと彼女による「至福の味わい」が描かれている。そして、安藤始氏が言うように、「作者はミステリーの手法を採用して⁽³⁾」いて、それは、「私」にとつて不思議なさつきを描くことでもある。例えば、最終場面で「私」が呟く「さつきは、なんで、俺ら四人と寝たんやろ」⁽⁴⁸⁴⁾という疑問のように、さつきの内面はあまり語られないし、彼女の美しさや彼女の与える「至福の味わい」には、いささか現実離れの感がある。

さつきの美しさと多情さ、少年たちの友情や恋心・嫉妬、そして、青春の日々への中年男たちの感慨などを、作品に即して考える必要がある。

それらの考察をふまえて、「暑い道」の特徴を明らかにする。

二 「私」とゲン―「山本食堂」にて―

作品は、「私」と友人の尾杉源太郎（ゲン）が、大阪此花区の山本食堂でステーキを食べる場面から始まる。こここのステーキは、場末の食堂には珍しく本格的なものである。

それは、人間の誤った趣味とか定説によつて半分腐らせたような肉とは違い、菌ごたえも、血が混じった肉汁も、澄んだうまみを持つ牛の肉だった。⁽⁴⁶⁹⁾

この店では「肉が枯れる」⁽⁴⁷⁰⁾のを防ぐため、電気冷蔵庫では

なく「氷で冷やす冷蔵庫」を使っていた。店主の老婆一人が「店をとりしきつてい」⁽⁴⁶⁹⁾て、肉もサラダも「私」を感心させる。しかもステーキの値段は四千円くらいで、一流と呼ばれる店なら一万円は取ると、ゲンは言う。（三章で明らかになるが、この山本食堂には友人のカンちゃんや養子になっていて、松坂で牛を育てて、この店にいい肉を入れている。）

「私」はゲンに驚かされてばかりいたが、彼は「さらに私を驚愕させる話を始め」⁽⁴⁷⁰⁾る。彼は「私」に、「さつきを覚えてるやろ？」と聞く。「私」は「わかつているのに」、「さつき？」と聞き返す。

「自転車屋のさつきや。まさか遠い虚ろな思い出とは言わさんでエ」

「ああ、あのさつきか」⁽⁴⁷¹⁾

「私」はさつきとともに、二十数年前に住んでいたスラム街を思い出す。しかし、「私」は、ゲンに「俺には、遠い虚ろな思い出や」と返答する。それは「私」の本音ではなく、さつきと四人（私・ゲン・カンちゃん・ケンチ）が肉体関係を持っていたことへの配慮による。当時、「みんな、必死でさつきに惚れて」いて、「さつきがその美しい体を自由にさせたのは、仲間四人の中では、この自分だけと思ひ込んでいた」⁽⁴⁷²⁾のである。だが、そういった記憶―さつきへの愛情や「仲間への詮索やら牽制やら嫉妬やら」―を、現在では懐しむようになっていく。

続いてゲンは、さつきが中学二年生のときにスラム街にやって来て、「高校二年生のときに、東京に行つてしま」い、「あのあと、俺

ら四人とも、腑抜けみたい暑い土手の上を歩いた」(472) ことを言う。それを受けて、さつきと会ったところの「私」の回想が始まる。

私たちが初めて、さつきを見たのも、遊郭のひしゃげた瓦屋根がS字状に揺れ動く真夏の昼下がりであった。(472)

当時「私」たちは、近所の「自動車の解体屋で午前中アルバイトをしていた。」そのバイトは、「若い私たちの肉体をわずかに二時間息も絶え絶えにさせ」(473) るきついものであった。ある日、バイトが終わり、「私」たちは帰路の土手の道を歩いていた。そして、ゲンとケンチの父親たちが勤めていた「工場の煙突から煙が出ていないのを無言で見」る。それは「また一軒の工場がつぶれる」(473) ことであり、ゲンとケンチの父親たちが失業者になることを意味する。

ケンチが「ここは、最低のどこや。日本で一番最低のどこや」と言ったとき、後ろから自転車屋の主人と少女(さつき)が、自転車に相乗りしてやって来る。自転車屋の主人は「私」たちに姪のさつきを紹介して、「まあ、よろしゅう頼むわ」と適当なことを言う。が、少女には「私」たちに聞こえないように、「ここいらには、こんな出来の悪いのんがうろろうしとる。適当にあしろうときや」(474)と注意する。それを聞き取った「私」たちは怒りもせず、「無言で少女を見つめるばかりだった」。それほどさつきが美しかったのである。

栗色の髪、どことなく青味がかった目、高くて形のいい鼻、知らない者は誰も中学二年生とは思わないであろう胸の隆起と腰

のくびれ……。 (474)

さつきは日本人とアメリカ人の混血であり、母親は「自転車屋の主人の妹で、佐世保の米軍基地でアメリカ兵相手の娼婦」(475)であった。が、さつきを残して、この冬に病死してしまう。

さつきは美しいだけでなく、「言い方や表情は、いかにも男あしらいに慣れてい」(474)た。彼女はここ(スラム街)に来るまでに、「親類の家を転々としたが、どこでも厄介な騒ぎの種」(475)となっていた。男たちは彼女を放っておかないし、彼女も男たちに応えたのである。

次の引用文は、さつきを初めて見たときの「私」の感想であり、その誇張ぶりに注目したい。

私は、さつきを初めて見たとき、背後の工場の煙突も、私鉄の架線も電柱も、土手下の家々のトタン屋根や、その周りの真夏の炎熱でぐったりとひからびている洗濯物も、いっせいに色を喪い、空白化して遠ざかっていったのを覚えている。すべては消えてさつきの美貌だけが、暑い土手の道に立ちあがっているかに見えたのだった。(474)

周辺の醜さや「私」の若さが、彼女の美しさを際立たせたのだらうが、それほどさつきは美しかったのである。引用文の最後の一文に、「私」の興奮が表れている。

そして、「私」たちは、その「はなやかな美貌と肉体の奥に、さつきはどこか汚れていないもの、卑しくないものを持っている」(476)と思う。彼女の「汚れていないもの」と「男あらしい」とは矛盾しているし、それが少年たちの思い込みだとしても、さつきには、

美しく純粹なものがあつたのだろう。(おそらくは、娼婦性と純粹さの同居であろう。)

そのせいもあつてか、彼女の美しさは「私」たちに、怯えと保護意識を与える。即ち、自分たちが「到底かないっこない男たちが、たちまちさつきの周りに群らがるだろうと、それぞれは予感して怯え」(476)、だからこそ、「私」たちは「絶えず、さつきを守らねばならぬと誓い合」う。「私」たちは、彼女と彼女の「汚れていないもの」を守ろうとする。ここには欲望(性欲)以上に、同じスラムの住民・同年年の女生徒としてのさつきへの保護意識がある。(スラムの少女が悪い男たちに弄ばれ、遊郭に売り飛ばされたりする事例が、彼らの身辺にはあつた。)

その後「私」たちは、彼女に寄ってくる上級生や高校生たちに、「考えつくあらゆる手口で邪魔しつづけ」、ときには「別の学校の不良グループに挑んで半殺しの目にあわされたりもした。」(477)が、「そんな私たちの努力を尻目に、さつきはいろんな男たちとつき合っていた。」(477) さつきは生来の男好きであり、男たちはそんな彼女に群がるのである。

そういったさつきを守る日々を過ごして、「私」たちは中学を卒業する。「私」とケンとは高校に進み、カンちゃんは家具店に就職し夜学の高校に通い、ケンチは製缶工場に就職したがすぐに辞め、やがてヤクザの組員となった。さつきは高校に進学したが、休みがちになり、「夜遅く、はやりの服を着、化粧をしてタクシーで帰ってくるようにな」(477)る。彼女の男遊びは、中学生のときに比べて本格的になつたのである。

三 さつきと「私」

「私」が高校二年生になつた晩春の夕暮れ時、さつきが突然、家を訪ねてくる。当時の「私」は「こんな最低の場所からおさらばするためには」、「授業料の安い国立大学」(477)に合格するしかないと思ひ、「人が変わったみたいに勉強にはげむようになつ」ていた。

その日、「頭に入っているはずの英語の熟語をどうしても思い出せず、自分でも不思議なほどの不安に駆られて、爪ばかり噛んでいた」(478)。そんなとき誰かが戸を叩き、ヤクザになつたケンチかもしれないと「不機嫌な顔をして板戸をあけ」ると、ケンチではなくさつきだつた。

「中に入れて」

さつきは命令口調で言い、たたきのところを歩を運ぶと、自分で板戸を慌てて閉めた。そして、近々、東京へ行ってしまふのだが、そのことで伯父さんとケンカして、ここへ逃げて来たのだと説明した。(478)

「高校生になつていつそう美しさを増したさつき」に、「私」の思ひは「息苦しいほど膨れあがつていた」が、彼女の来訪の真意が分からない。

さつきは、お別れに来たのだと言い、私の勉強机に両手をついて、「淫売の娘は、やっぱり淫売や。伯父さん、そう怒鳴つて私を殴るのよ」とつぶやいた。そして、背を向けたまま、私のことを好きだと言つた。四人の中で、いつも一番好きだつた

と。(479)

最後のセリフは、実は他の三人にも言っているのだが、このとき
のさつきの心情は分かりにくい。単に性欲だけの行動とも思えな
い。東京に行つて会えなくなる前に、今まで自分を守つてくれた
「私」たちに、彼女のできる恩返しをしたかったのだろう。しかし、
それは肉体関係を結ばなくとも可能である。「私」たちには性欲も
あるが、彼女を守りたいという愛情があった。さつきは自分のでき
る最上のこと（性交）で、恩返しをしたかったのかも知れない。
（彼女にとって、性と愛は近かったのだろう。）

夕陽が落ちてしまったとき、私とさつきは、畳の上に横たわ
った。さつきは、私の耳たぶを噛んだ。私は、さつきに言われ
るままに動いた。目がかすんで、心臓が破れそうになった。あ
っけなく終わったあと、なお乳房に触れつづける私の頭を、さ
つきは両手でいつまでも撫でた。(479)

この引用文を見る限り、さつきは、伯父が罵るように、性欲や金
のための「淫売」というよりも、「母」のイメージに近い。(4)
ん、さつきには娼婦性があり、彼女自身も自覚している。

「私」は、さつきとの肉体関係に対して、次のように思う。
夢見心地とは、まさにあのような状態を言うのだと私は思う。
私は、自分がきつと幸福になるような気がして、何日もさつき
の体の感触の中でさまよった。(479)

この引用文を見ると、さつきは、男たちに「きつと幸福になるよ
うな気」にさせる、「夢見心地」を与える力を持っている。しかも、
「私」はさつきとの性交を、その後、望んではいないようである。

単なる性的快感を超えた良さが、さつきにはある。だからこそ、
「私」たちは別れた後も、さつきへの愛情を持ち続けたのだろうが、
こういう状態は、現実には起こりにくいのではないか。彼女に男か
ら男へと渡り歩く娼婦性がある限り、男たちは彼女を美化しにくい
し、強い愛情が持続しない限り、記憶は風化する。(5)

そういう点では、さつきは東京に行くことによって、「私」の初
恋の相手として存在し続けていると考えられる。

四 ケンチの提案とその結果

六月になって、さつきは某男性週刊誌のグラビアに掲載され、八
月には東京へ行くことになった。それを知らせたケンチは、「本物の
ヤクザ」になったケンチが、「さつきが東京へ行くがどこへ行こ
うがしつこくつきまとうだろう」(479)と舌打ちする。「私」は「窓
から見える遊郭のくすんだ居並び」を指差して、「あそこに行くよ
り、はるかにましや」(480)と言う。「私」は、さつきの上京（未
来）に明るいものを感じている。スラムから出て、日の当たる場所
に行くのである。つまり、彼女の上京は、スラム街の住民にとって
は出世である。(だが、その予想が外れていたことは、後のゲンの
話から分かる。)

さつきが東京に行った翌日、ケンチがやって来て、三人を土手に
連れて行き、

「この中に、さつきに手エ出したやつがおるやろ。中学生のと
きの誓いを忘れたんか。絶対、この中に、さつきと寝たやつが

おるんや。裏切り者がおるんや」

逃げようとしたカンちゃんの頭を、ケンチは二回平手で叩いた。(480)

もつとも、ケンチもさつきと寝ていた。だから、「私」に「裏切り者はお前ではないか」と詰め寄られて、ケンチは長い間立ちつくした後、「穏やかな声で提案」(481)する。

「恨みっこなしにしようやないか。みんな、ひとりずつ、あの塚のところへ行つて、さつきと寝たやつは、十円玉を中に入れる。そのあいだ、他の者は背中を向けて目をつむっとく。どうや?」(481)

ケンチの提案に従つて、「私」は十円玉を塚に入れる。それは、友情や自慢よりも、「あのところけるように美しいさつきの裸体に包まれたやつがいるということを示しておきたかった」からである。この時点で「私」は、四人全員がさつきと寝ているとは思っていない。

ケンチが塚を逆さにすると、十円玉が三枚出た。「私たちは、また長いこと顔を見合わせ」(482)る。三人がさつきと関係し、誰か一人が彼女と寝ていないのである。ケンチが十円玉を蹴りつけ、「焦点の定まらない目で土手の道に登り、どこへ行くともなく上流のほうへ歩きた」し、他の三人もあとを追う。すると、突然カンちゃんが「悲痛な泣き声」で泣きだす。ケンチは「なんや、お前だけ、さつきの施しを受けられへんかったんか」と怒鳴りつけると、「カンちゃんは泣きながら、首を横に振り」、

さつきが好きだったのは、この俺だとばかり思っていた。さつ

きは、あのとき確かに俺にそう言ったのだと声を震わせ、また泣いた。(482)

ケンチは、「カンちゃんの頭を叩こうとしたが、その手で自分の髪をかきむしって空を見あげた。」さつきの嘘がばれたのである。彼女は四人に、「あんただけが好きだ」と言つて、肉体関係を持ったのである。それを知った四人は泣いたり怒ったりして衝撃を受けたが、さつきに対しての憎悪はなかった。前述したように、「私」はさつきとの関係を、その後も大事に思っているし、残りの三人もさつきと縁を切っていない。それほどさつきや彼女の「施し」がすばらしく、肉体とともに心をも満足させたのである。それは女としての美化であり、ある種の理想だろうが、いささか疑問が生じる。なぜなら、もしさつきに男たちを、心身ともに浄化する力があるのならば、上京後の彼女の転落はなかったのではないか。⁽⁶⁾

その後、「私」たちは駅前への暑い道を、一列になって歩いた。後年になつても思い出すように、それは「私」たちにとって初恋の終わりであり、青春の一つの区切りだったのである。

五 後 日 談

場面は現在に戻る。ゲンはさつきのその後を、「私」に語る。

「俺が大学を卒業したころは、さつきはもうぼろぼろになつた。(中略)写真家に惚れて遊ばれたあげく別れたり、テレビ局のプロデューサーの女になつたりしながら、ときどきケンチと逢うてたみたいや。そうしてらうちに、ケンチは刑務所行

きや。(中略) さつきが、酒と薬で見る影もなくなって、あげくは誰の子かわからん子を墮したところ、カンちゃんが、さつきを訪ねて行きよった。(483)

さつきは東京で男たちと関係し、弄ばれ、酒と薬で「ぼろぼろ」になった。彼女は男たちに幸福を与えたかもしれないが、酒や薬も加わっての男遍歴の末に、彼女はどんぞこに墜ちる。(こちらの方が故郷の時とは違い、リアリティがある。)

だが、さつきを忘れられないカンちゃんは、彼女を見捨てなかった。「松坂で牛を飼うてる親戚の仕事を手伝うてるうちに」、「山本食堂」の婆さんに見込まれて養子になり、さつきと結婚する。彼女は、カンちゃんと牛を育てて元気になった。のんびりした環境の中で過ごし、健康な体を取り戻し、愛してくれる保護者のカンちゃんといて、彼女の娼婦性が抑えられていったのだろう。少し太ったが、「相変わらず美しい」(484)と、ゲンは言う。ここには、カンちゃんへの嫉妬や憎悪の念はなく、彼女の幸福を喜び、見守っている感がある。

「私」が、やがて出所するケンチのことを心配すると、ゲンは二人で説得しようと持ちかけ、二人の結婚を「あいつは、きっと喜ぶような気がするんや」と言い、「私」も「そんな気」がする。ケンチもさつきの幸せを喜ぶと、二人は感じている。

なぜならば、四人がさつきを守ったり、互いに争ったのは二十数年前のことである。彼らは既に、四十歳に近い。故郷であったスラム街もなくなつたように、青春は遠い存在である。だから、「私」のゲンへの問いかけ―「さつきは、なんで、俺ら四人と寝たんや

ろ」や、「さつきに女の体を教えてもらた感想はどんなもんやった？」(485)―にゲンは返答せずに、「お互い、その件に関しては、老後の思い出話にとっておこう」(485)と言ったのだろう。青春の思い出としてさつきは輝いているのであり、それを否定するのは彼らの本望ではない。それ故に、二人とも現在のさつきに会わないように、彼女が「山本食堂」にやって来る前に店を離れる。

以上見てきたように、さつきは自由奔放な恋に生きる女であり、好意(欲望)を寄せられると肉体関係を結ぶような女であるが、彼女の優しさは四人の男友達に対して、公平に応えたことから分かる。しかし、大阪を離れて東京に行き、「私」たちのような保護者ではない悪意の男たちに出会い、酒や薬で「ぼろぼろ」になる。しかし、その後、カンちゃんと再会し、結婚して幸せになる。

「暑い道」は、美少女さつきへの四人の少年の思いと交流、そして、大人になつた四人の友情や懐旧の情を描いている。少年時の状況が「醜悪な現実」であつたからこそ、さつきの美しさや「愛情」が印象的になり、その思い出もあり、青春の場であつたスラム街や、「過去の自分」たちへの郷愁が浮上している。

さつきは「私」たちにとって、スラム街での初恋の美少女として存在し続け、現在の状況(カンちゃんの妻)とも絡み合つて、「私」たちの前にある。それは、懐かしい思い出として「私」に存在しつづけ、作品に、過去の青春や故郷へのほろ苦さと、ほのぼのとした余情を醸し出している。

(注)

- (1) 本文の引用は、『宮本輝全集』13（新潮社 1993・4）による。（ ）内の数字は、ページ数である。
- (2) 引用は、新潮文庫『真夏の犬』（1993・4）「解説」による。
- (3) 引用は、安藤始『宿命と永遠―宮本輝の物語―』（おうふう 2003・10）による。
- (4) その果てには、「聖なる女性」があるかもしれない。例えば、さつきを「西瓜トラック」のアパートに住む性欲の強い女と比べると、そういった印象も生じる。また、娼婦としての「泥の河」の喜一の母と比べると、さつきは男たちに「幸福」を与える女である。そのためか、彼女が東京でほろほろになっても、カンちゃんに救われる。（もちろん、そこには、中学生時代からの彼女への愛情があるろう。）
- (5) もっとも、さつきにはケンチがつきまとい、ゲンもカンちゃんも彼女から離れていない。「私」だけがゲンの話を聞くまで、さつきから離れていたのである。
- (6) この点について考えると、上京後のさつきには、中学生時代に持っていた「汚れていないもの」が薄れていた。また、東京の男たちには、「私」たちのような保護意識がなかったからかもしれない。
- (7) この点に関して、「道頓堀川」の鈴子を想起する。彼女は結婚した後、愛人と出奔するが、結局、夫の元に戻り、妻としての無難な日々を送る。さつきもカンちゃんと結婚して、穏やかな日々を過している。「私」たちは、彼女の幸せが続くことを望んでいる。